

Kyoto Urban Wind Installation

Interview

野外インスタレーション公募展 大賞受賞

ユージン・ソレル氏

Eugene Soler

1977年フィリピン、マニラ生まれ。建築家。豪州、バブアニューギニア、スウェーデンで教育を受ける。2003年ニューキャッスル大学(豪)建築学部卒業。05年限研吾建築都市設計事務所、坂茂建築設計にてインターンシップを経験。10年ロンドンAAスクール空間パフォーマンス・デザインコース卒業。その後、豪州、ロンドン、日本に拠点をおきながら世界各地で活動。第44回セントラル硝子国際建築設計競技最優秀賞。18年には奈良で開催された「ならまち遊歩」にて、インスタレーション作品「ならまちプロジェクト」を発表。現在は奈良市在住。



5000個の鈴にひとつひとつ針金を通すところから制作はスタートした



2月の寒さ厳しい北山に 全国各地からボランティアスタッフが集った



手作りのベンチなどが設置されゆったり過ごせる空間が誕生 期間中は鈴の音が響くなかで様々なパフォーマンスが行われた

人と自然と時間を繋ぐアート 五感で感じる「自然の声」

—まずは受賞されたお気持ちと、作品の見どころを教えてください。

受賞はとても嬉しかったのですが、同時に衝撃を受けました。私のプロジェクトは、5万本の葦に、大きさ、音色もさまざまな5000個の鈴を取り付け、土台に1本1本挿し込むという壮大なプロジェクトのため、一緒に制作に携わってくれる多くの人が必要になります。多数の人が関わるため、嬉しさも多少の不安、緊張も感じました。

今回の公募要項を見た時に、展示場が広大な敷地だったことから、公園のように座って何かを考えたり、ゆっくり旅をしているよ



うな気持ちになれる時間の設計を思い付きました。そして、嵐山の竹林を歩いた時に感じた、大きな自然に包まれるようでいて、時には気づかないくらいの繊細な感覚を、風によって奏でられる多彩な音で表現したいと思いました。自然から放たれる微かな「自然の声」を感じてもらえればと思いました。

—インスタレーション作品や建築において、ご自身が大切にされていることは何でしょうか。

建築物は、できた時点というのは完成ではなく始まりです。実際に人が使うこと、そして時間が経つにつれて周りの自然と交わっていくことで、建物は完成すると思っています。

そして、作品づくりにはなるべく多くの人を巻き込みたいと思っています。特に地元の人、現地の自然や時間も含めたコミュニティ全体ですね。人と自然、そして時間を積み重ねていくプロセスが重要であり、何かをつくることの喜びです。私はアートとは「ど

うやってお互いが関わり合っていくか」であると考えています。

—京都が持つ魅力や課題について、どのようにお考えですか。

私は京都に来るとよく龍安寺に行くのですが、縁側から眺める石庭はもちろん、境内の池や樹木といった自然を通り抜けて進む順路などが本当に素晴らしい。庭園が多い京都は「自然と繋がる場所」であり、魅力を感じます。その反面、テクノロジーが進化するにつれて、人と人、自然と人との断絶が深まっているようにも感じます。便利になったがゆえの弊害ですが、文化や自然、仕事に対する個々の責任感が薄くなっている現代において、そうした繋がりを取り戻すには、互いに責任を持ちながら共に働くことが大事だと考えます。私の今回のプロジェクトでは、自然と向き合う大変さもありますが、人と自然と時間とを繋げる場になると信じています。

審査員コメント



安藤 忠雄氏
建築家

全体的に、意欲的で挑戦的な作品が数多く見られた。なかでも、わずかな風の動きで繊細な動きを見せ、音を聞かせるユージン・ソレル氏によるインスタレーションのアイデアが目を引いた。風で動く彫刻は他の案にも見られたが、嵐山の竹林にインスピレーションを得たというこの案は、鑑賞者の五感全てに訴えようとする意欲が随所に感じられた。京都の都市環境の中に、その地に相応しい自然の素材で、動きや音に抽象化された自然環境(提案者は「自然の声」と称している)を再現しようという試みは、京都文化プロジェクトの主旨にも相応しいものと考えた。



片岡 真実氏
森美術館副館長兼
チーフ・キュレーター、
京都造形芸術大学教授

京都の文化力を象徴するものとして、日本の伝統文化や京都の自然観を特定の屋外空間でどのように表象するかという課題に挑戦した提案が多く見られた。大賞に選ばれたユージン・ソレル氏の提案はコンセプトとその具体的な視覚化、想定される観客の体験が美しく均衡したもので、嵐山の自然環境が凝縮された風や音など、五感に訴える要素も評価した。その他、都市生活と祝祭性を融合したブノワ・モーブリー氏のスピーカーによる彫刻、諸行無常と永遠性を表現した大松俊紀氏の天に昇る階段、既存の建物とダイナミックに関わる井口雄介氏の幾何形体の連続による円環も、コンセプトの本質が巧みに形体化・視覚化され、作品そのものに強度と存在感のある優れた提案だった。



建畠 哲氏
京都芸術センター館長、
多摩美術大学学長

京都文化プロジェクトの今回の野外インスタレーションのコンペは、この古都ならではの環境が現代アーティストの挑戦意欲を掻き立てたのであろう、他府県のみならず海外からの応募も多かった。大賞に選ばれたユージン・ソレル氏のプランは、上に小さな鈴をつけた細い葦を密集させた大規模なインスタレーションで、無数の鈴が微風に揺れながら「ホワイトノイズ」を奏でるといふ、繊細にして不思議なエレガンスを醸し出す体験空間が出現するはずである。オーストラリアから移住し奈良に身を置くアーティストならではの発想というべきか。他にも祝祭性やモニュメントとしての造形性、建築的なユニークな構造など、注目される提案が幾つも見られた収穫の多いコンペであった。

開催概要

「街にアートがPOP UP!」野外インスタレーション公募展

【応募期間】2018年6月25日～9月23日

【賞】大賞1点[制作補助費500万円、作品展示] 入選3点程度[賞金5万円、プラン展示]

【審査員】安藤忠雄(建築家)
片岡真実(森美術館副館長兼チーフ・キュレーター、京都造形芸術大学教授)
建畠哲(京都芸術センター館長、多摩美術大学学長)

【大賞作品展示】2019年2月16日～3月17日 【展示会場】旧京都府立総合資料館 前庭

【表彰式】2019年2月16日 京都府立京都学・歴史館

【関連イベント】

おも茶会
[2019年2月7日、京都芸術センター]
ヨタの鬼セレブレーション展
[2019年2月16日～3月17日、岡崎公園(ほか)]
シンポジウム「都市空間における祝祭と文化」
[2019年2月16日、京都府立京都学・歴史館]

【企画・制作】京都芸術センター